

スヴァヤンブー仏塔と『ナーマサンギーティ』をめぐって

スダン・シヤキヤ

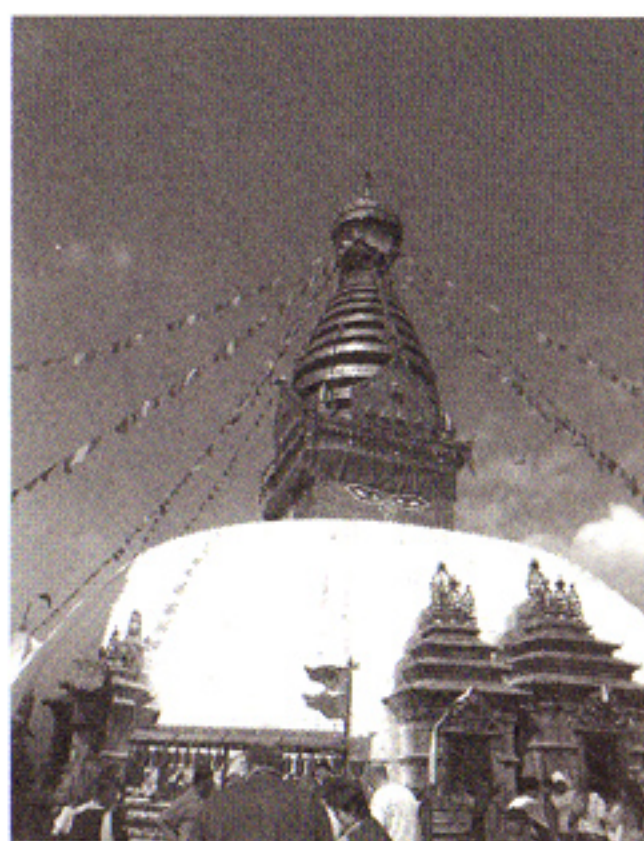
はじめに

「スヴァヤンブー」(Svayambhū) は、ネパールの首都カトマンズの郊外の丘にそびえる仏塔であり、ネパールを訪れる人びとの間で「目玉寺」、「モンキーテンプル」として親しまれている。ネパールの全仏教徒の信仰の中心であると同時に、古くからインド、チベット等周辺の人びとにとっても聖地であった。白いドーム型で、四方に仏の目と鼻が描かれているこの仏塔はネパール独特の宗教建築スタイルである。ネパールでは仏塔信仰が広く普及し、カトマンズ盆地だけでも仏塔は数千体数えられる。これらの仏塔の多くは、ストゥーパ(stūpa)、チャイトヤ(caitya)、チバー(cibha、ネパール語の呼び方⁽¹⁾)という呼び名をもった「金剛界マンダラ」、「悪趣清浄マンダラ」、「法界語自在マンダラ」等の核を立体化した形とも言えよう。ここで取り上げる「スヴァヤンブー仏塔」はネパールを代表する仏塔の一つであり、後に改めて述べるように「法界語自在マンダラ」(Dharmadhātuvagīśvaramaṇḍala) の立体形とみなされている。

この仏塔の周辺ではハーリーティ（訶梨帝母）の寺院、チベット仏教の寺院等種々の寺院が存在する。また、早朝から多くの参拝者でにぎわっており、『ナーマサンギーティ』/ *Nāmasaṅgīti* / を読誦している光景や「バジヤナ」という宗教音楽を唱っている人びとも見ることが出来る。つまり、このひとつの仏塔の周辺にネパールに現存するすべての仏教、すなわち金剛乗、テラバーダ、チベット仏教の寺院が集まっているのである。本稿では、特にスヴァヤンブー仏塔とネパールで最も読誦されている密教経典『ナーマサンギーティ』との関係について考察する。

スヴァヤンブー仏塔と『ナーマサンギーティ』について

まず、スヴァヤンブー仏塔について述べよう。この仏塔は様々な神話・伝説を持つため、それを起源とする説もそれぞれ存在するが、五世紀の碑文にスヴァヤンブーに関する言及があるので少なくとも五世紀以前には成立されていたであろうと推定できる。



スヴァヤンブー仏塔

伝説によれば、現在のカトマンズ盆地はもともと湖であったとされている。その湖の蓮華の上に「スヴァヤンブー仏塔」が浮かんでおり、参拝のため、中国五台山から文殊がカトマンズ盆地にやってきたとされている。その文殊 (Manjusri) がカトマンズ盆地を囲む山を刀で切断して湖水を放出し、人びとを住まわせ、「スヴァヤンブー仏塔」へのアクセスを楽にしたという。このことから、スヴァヤンブー仏塔は仏・菩薩からも崇拝されているほどの存在であったことがわかる。そ

のためか、今日でもこの仏塔そのものは一尊格とし、「本初仏」(Adibuddha) すなわち仏の中の仏で、「初めに悟ったもの」または「始まりも終わりのもない存在」と解釈され、「主、保護者、救済者」等の意味を持つ「ナータ」(nātha) という名称を付され、「スヴァヤンブー・ナータ」とも呼ばれている。

密教經典の中で、「本初仏」(adibuddha) という言葉を明確に用いているのは八世紀前半成立の『ナーマサンギーティ』(Nāmasaṅgīti)⁽²⁾ であるが、それに類似する概念として大毘盧遮那を「無始無終の仏」として解釈する考えは『真実撰経』の中で既に見られる⁽³⁾。また、「スヴァヤンブー」(svayambhu) という言葉は「自分で生じた存在で、他者の縁を必要とせず生じるもの」と解釈され、「本初仏」の意味合いも含んでいる⁽⁴⁾。『ナーマサンギーティ』は文殊たる文殊智慧薩埵を八百以上の名号をもって称讃する經典であるが、その中で「本初仏」および「スヴァヤンブー」の両者ともが文殊を称讃する異名として用いられている。スヴァヤンブー仏塔を「スヴァヤンブー・ナータ」、「本初仏(アーディブツダ)」、「アーディナータ」等の名で呼ぶ背景に、その仏塔に「本初仏」の要素を持たせたいという意志がうかがえる。いずれにしても、ネパールに現存する数千の仏塔の中で「スヴァヤンブー仏塔」は特別な存在であり、ネパール仏教界を象徴するものでもある。

スヴァヤンブー仏塔はネパールで最も親しまれている仏塔であることを既に述べた。その一方、『ナーマサンギーティ』は常用經典として流布し最も読誦されている經典であり、これは日本で言えば『般若心経』のような存在であると言えよう。

『ナーマサンギーティ』を誦えたり、写経したり、それを他者に説いたりすることによって、人びとは増益、無病、長寿等多くの現世利益から覚りまでという計り知れない功德が得られると經典の中で説かれている。そのため、この經典はインド・チベット・ネパールで最も普及した經典の一つで、数多くの註釈書や儀軌類の文献も

残されている。特にネパールにおいてはこの『ナーマサンギーティ』を僧侶はもちろん、在家の人びとも暗記して誦えたり、写経したりする習慣が今日でも継承されてきているのである。

また、『ナーマサンギーティ』に基づいて建立されているマンダラに「金剛界マンダラ」の流れを汲んだ「法界語自在マンダラ」がある⁽⁵⁾。これはネパールで最も作例の多いマンダラであり、「ダルマダートウ」(dharmadhātu) として呼ばれ、これを立川武蔵博士が「マンダラ台」と称している。通常これらはストゥーパまたはチャイトヤと呼ばれる仏塔の側に建立される。前者はマンダラの二次元的な形であることに對して、後者は三次元的なまたは立体形である。両者は今日でも新しく建立されているが、その目的は亡くなった人びとを追悼することにある。一般的にネパールでは人が亡くなると火葬され、その後川に流され、基本的に墓を作る習慣がない。しかし、喪が明けてから「仏塔」または「マンダラ台」を建立する場合、その中に納骨するか、それがない場合は遺品を燃やした灰を入れる。これらは居住地や寺院の中庭に新しく建立されることが多く、いわゆる墓と違って、遺族を含み、誰でもが供養することができるのである。

『スヴァヤンブー・プラーナ』について

前述したように、ネパールにあるスヴァヤンブー仏塔は、立体の「法界語自在マンダラ」の代表的な存在である。スヴァヤンブー仏塔及び「法界語自在マンダラ」の両者に加え、『ナーマサンギーティ』の三つの結びつき



マンダラ台（法界語自在マンダラ）
パタン市、ネパール

に関する記述はサンスクリット語の『スヴァヤンブー・プラーナ』/Svayambhūpurāṇa/以下『プラーナ』と略す)という韻文から構成される文献に見られる。『プラーナ』は現在のネパール、カトマンズ盆地のスヴァヤンブー・チャイトヤという仏塔の起源に関する物語であるが、様々な編纂を重ねて多種の類本が存在する。その成立年代については様々な説があるが、写本として最も古いのは十五世紀のものである。

プリンカウスは『プラーナ』を八、十または十二章からなる四種に分類している。⁽⁶⁾ 其中で、ネパールで最もよく知られているものは十章からなる版である。⁽⁷⁾ そのうちの第六章にスヴァヤンブー仏塔および『ナーマサンギーティ』に関するエピソードが描かれているので、その概略を以下に示す。

インドのヴィクラマシーラ僧院 (Vikramasīla) の学僧であるダルマシュリーミトラが、そこで大衆に対して『ナーマサンギーティ』の意義を説いていた。ある日その大衆の中の一人から『ナーマサンギーティ』に説かれている十二文字 (a, ā, i, ī, u, ū, e, ai, o, au, am, ah) の意義を解説するよう求められた。ところが、ダルマシュリーミトラ自身もその秘義を知らなかった。そこで、ダルマシュリーミトラは『ナーマサンギーティ』所説のその十二文字の意義を中国五台山 (Mañjuśrīparvata または Pañcasikha) に住しておられた文殊菩薩から直接授かるため、ヴィクラマシーラを出発する。五台山へ向かう途中、ダルマシュリーミトラはネパール(カトマンズ盆地)にたどり着くが、道に迷ってしまう。その一方、文殊もダルマシュリーミトラが自分のところへ向かっていることを見知し、彼に法を授けるために農民を装い、自ら五台山からネパールへ向かう。道に迷ったダルマシュリーミトラは畑仕事をしている農民が文殊であることを知らず、彼に道を尋ねる。その農民は親切に道を教えるが、日も暮れてきたから自分の家に宿泊して次の日に出発するようにすすめる。ダルマシュリーミトラもそれに賛同し、農民のお誘いを受ける。そして、農民はダルマシュリーミトラにできる限りのも

てなしをし、ダルマシュリーミトラは旅の疲れで、その晩早く休んでしまう。

ところが、彼は十二文字の秘義を一刻も早く知りたいという好奇心のために眠りが浅かった。それで、途中で目が覚めてしまった。すると隣の部屋から話し声が聞こえ、その内容から昨日出会った農民は他でもなく文殊その者であることに気がつく。ダルマシュリーミトラは慌てて農民のところへ行つて礼拝し、自身に『ナーマサンギーティ』の十二字の秘義を伝授するように申し出る。当然ながら文殊菩薩も彼の望みをわかつていたので、『ナーマサンギーティ』の秘義を教えるためにまず法界語自在マンダラを建立し、次第通り修法を成就し、灌頂を受けなければならない』と告げる。早速「法界語自在マンダラ」を建立し、彼は文殊から灌頂を受けて、十二字の秘義を伝授される。それから文殊が「ダルマシュリーミトラよ、この秘義を世の人びとのために役立てなさい。そのうち私もヴィクラマシーラに行く。ウトパラ (utpala) の花を手を持っていることが私であることの印だ。」と告げて、文殊はそこから姿を消す。目的を達成したダルマシュリーミトラはヴィクラマシーラ寺院に戻り、大衆に再び通常通り『ナーマサンギーティ』の十二文字の意義等を説いていった。

ある日、いつものように『ナーマサンギーティ』を説いている時、最後列にウトパラを手にし、古びた服装の老人が現われる。ダルマシュリーミトラはその人物が自分の師、文殊であることにすぐ気がついた。しかし、大衆の前であのような格好の人が自分の師であると名乗ることを恥ずかしく思い、皆の前で礼拝することを止め、説法を終えて皆が帰ることを待った。そして、皆がいなくなつてから急いで文殊のもとへ行つて礼拝した。しかし、ダルマシュリーミトラは師匠を無視した罪で視力を失つてしまい、目の前に現われた自分の師匠の文殊すら肉眼で見ることが出来なくなつてしまう。しかし、彼はそこで文殊に更なる法を授けられ、自分の智慧 (jñāna、ジュニヤーナ) を養わせる。「ダルマシュリーミトラよ、これからは智慧の目で世を見て、世のため

に法を説きなさい。」と文殊は告げる。視力を失ったダルマシュリーミトラはその後、ジュニャーナシュリーミトラ (Jñānaśrimitra) と呼ばれ、世の利益のために説法に尽く⁽⁸⁾。

以上のように、ダルマシュリーミトラは五台山⁽⁹⁾へ出かける途中ネパール(カトマンズ盆地)にたどり着き、そこで文殊菩薩と会う。そして、文殊菩薩がダルマシュリーミトラに法界語自在マンダラの灌頂を授け、『ナーマサンギーティ』の十二文字の秘義も伝授する。

『プラーナ』に見られるこの文殊菩薩とダルマシュリーミトラのエピソードであるが、初期の『プラーナ』には「ダルマシュリーミトラがネパールにたどり着く」部分が存在しない。プリンカウスによれば、これは後に付加され、いわゆる「ネパール化」された部分であるという⁽¹⁰⁾。ここでは、文殊菩薩がダルマシュリーミトラに対して『ナーマサンギーティ』所説の十二文字の秘義を説くと明記しているものの、その具体的な内容が説かれていない。また、その「法界語自在マンダラ儀軌」の詳細な内容についても述べられていない。ちなみに、このエピソードに出てくる文殊菩薩がダルマシュリーミトラを灌頂するために建立した「法界語自在マンダラ」は、現存のカトマンズのスヴァヤンブー仏塔であると伝えられている。

ここで注目すべき点は、『プラーナ』で言及されていない十二文字の秘義や「法界語自在マンダラ儀軌」に関しては、十世紀前半頃に活躍した学僧であるマンジュシュリーキールティ (Mañjuśrīkīrti) の著作、『聖ナーマサンギーティ広釈』(東北2534) 及び『法界語自在マンダラ儀軌』(東北2589) に説かれているということである。特に、前者には十二字の意義として、それぞれ十二地(『十地経』が説く十地に信解行地と普光地を加えたもの)及び十二波羅蜜(『十地経』が説く十波羅蜜に宝蓮波羅蜜と金剛業波羅蜜を加えたもの⁽¹¹⁾)に配当されている。一方、後者には「法界語自在マンダラ」の詳細な成就法が説かれているのを見ることが出来る。

現存のスヴァヤンブー仏塔の上部に存在する輪はそれらの地 (bhumi) と波羅蜜 (paramita) を象徴し、悟りの段階を表したものであるとされ、ネパールに現存する多くの仏塔にこれを確認することができる。

まとめ

スヴァヤンブー仏塔は「スヴァヤンブー・ナータ、アーディナータ、アーディブツダ」等の呼び名を持ち、ネパールにおいて「本初仏」として崇拜されていること、そして『ナーマサンギーテイ』では文殊を「本初仏」という最高の地位に置くという点から両者は密接な関係にあることが分かる。また、『プラーナ』はネパールに多く伝わる文殊伝説、特に文殊菩薩、スヴァヤンブー仏塔、『ナーマサンギーテイ』、『法界語自在マンドラ』が、歴史的な事実や伝説と入り混ざって一緒に登場するエピソードが伝えられている文献である。ここにおいて「十二文字の秘義」や「法界語自在マンドラ」に言及しながら、詳細を説いていない部分をマンジュシュリーキールティの著作が示していることにも注目した。彼に関しては『プラーナ』のような文献に記述されていないものの、ネパール仏教界では、マンジュシュリーキールティの解釈、特に『ナーマサンギーテイ』に関する思想及び儀軌の影響を無視することはできないであろう。

以上、述べてきたように、ネパールではスヴァヤンブー仏塔と『ナーマサンギーテイ』に代表される仏塔及び文殊の信仰は、長い年月をかけてネパールの社会に浸透している。また、同信仰は日本をはじめアジアの各地域に様々な形で広まっており、それぞれ独自の宗教文化や伝統を築いている。それらを比較検討することはアジアに広まっている仏教文化史の解明に繋がると考えるが、本稿はその礎の一つとしたい。

【参考文献】

氏家昭夫「ネパールの仏塔信仰について」『日本仏教学会年報』第3号、一九七四年、pp. 85-102.

——「スヴァヤンブー生起の物語」『高野山大学論叢』第11巻、一九七六年、pp.1-39.

桜井宗信「『ナーマサンギーティ』読経から瞑想へ」『インド後期密教 上』（松長有慶編）春秋社、二〇〇四年、pp.115-130.

スタン・シャキヤ「『文殊真実名義経』について ネパール仏教界における位置づけ」『普通寺教学振興会紀要』第9号、二〇〇三年、pp.117-133.

——「Mañjuśrīkṛti 釈を中心とする Nāmasaṅgīti の一考察」『仏教学』第46号、二〇〇四年、pp.77-109.

——「『法界語自在マンドラ』と『ナーマサンギーティ』について」『密教学研究』第40号、二〇〇七年。

長野泰彦・立川武蔵編『国立民族学博物館研究報告別冊7号 法界語自在マンドラの神々』国立民族学博物館、一九八九年。

梅尾祥雲『後期密教の研究 下』臨川書店、一九九八年。

Brinkhaus, Horst. "The Textual History of the Different Versions of the 〈Svayaṃbhūpurāṇa〉" *Nepal Past and Present* (Géard Toffin ed.) Sterling Publishers, New Delhi, 1993, pp.63-71.

Lal, Banarasi (ed.). *Āryamañjuśrīnāmasaṅgīti with Amṛtakaṇikātippanī Bhikṣu Raviśrījāna and Amṛtakaṇikodyotanibanbha of Vibhūcandra*, CIHTS,

Vārāṇasī, 1994.

Matsunami Seiren. *A Catalogue of Sanskrit Manuscripts in the Tokyo University Library*, Suzuki Research Foundation.

Rospatt, Alexander von. "On the conception of the Stēpa in Vajrayāna Buddhism The example of the Svayaṃbhūaitya of Kathmandu" *Journal of the Nepal Research Centre* Vol. 11, 1999, pp.121-147.

Shakya, Hem Raj Śrī Svayaṃbhūmahācaitya Svayaṃbhū Vikāsa Maṇḍala, 1979, Kathmandu.

Shastri, Haraprasad (ed.). *The Vṛhat Svayaṃbhū Purāṇa* Bibliotheca Indica Vol. 133, Calcutta, 1894-1900.

Vajracarya, Vadri Ratna Śrī Svayaṃbhū Mahāpurāṇa Lalitpur, 1996.

註

- (1) これらの仏塔の多くには金剛界マンドラの四仏（阿閼、宝生、阿弥陀、不空成就）が四方向に安置されている。また、中尊の大日如来は東南の方向、つまり阿閼側に安置されることもある。ネパールではストゥーパとチャイティヤを厳密に区別することはないが、スヴァヤンブー仏塔のようなドーム型の場合、両方の呼び名を使っている。一方、宮殿形で居住地の中庭等に建立されている小型の仏塔のことを好んで「チャイティヤ」または「チパー」と呼んでいる。
- (2) この經典に関して「桜井2004」を参照。

スヴァヤンブー仏塔と『ナーマサンギーティ』をめぐって

- (3) [梅尾1989: 699-703].
- (4) 「本初仏」は最も遅れて成立した『カーラチャクラ・タントラ』という密教経典にも重要なキーワードとして用いられている。また、同経典の註釈書に『ヴィマラプラバー』に『ナーマサンギーティ』の引用が多くあり、そこでは「最勝たる本初仏を知らない者は『ナーマサンギーティ』を知らない、『ナーマサンギーティ』を知らない者は持金剛の智身を知らない、持金剛の智身を知らない者は真言乗を知らない。」と説かれ、「本初仏」と『ナーマサンギーティ』について言及されている。[シャキヤ2004: 92-95].
- (5) このマンダラを建立する典拠となっている『ナーマサンギーティ』の偈頌や名称に関して、『シャキヤ2007』を参照。
- (6) [Brinkhaus: 65-68]。さらに、ブリンクハスは『プラーナ』の類本及び改訂の段階についても述べている。
- (7) [氏家1976]では第十章からなる『プラーナ』のうちで、第一章から第三章の和訳を提示している。
- (8) [Shastri1894]、[Vajracarya 1996: 183-194].
- (9) 先ほども紹介したように、湖のカトマンズ盆地を人が住めるようにした文殊も中国五台山から来たとされている。五台山は古くから文殊が住する聖地としてアジア全体の仏教徒から広く親しまれている。
- (10) [Brinkhaus 1993: 69].
- (11) [シャキヤ2004: 86-89]。一方、ラヴィシユリージュナーナ [Lal 1994: 18] も十二字をピータ・ウパピータ等の十